

2025年度 数理論理学

講義資料(3)

青戸 等人 (知能情報システムプログラム)

目次

- 命題論理の意味論
- モデルと反例
- ブール関数

命題論理の意味論

ここでは、前回の授業で見てきた真理値表による真理値の計算を **数学的な概念を用いて定義する**。

なぜ、そんなことをするのだろうか？ すべてを、真理値表だけでやるのではダメなのだろうか？

● 数学的な概念を用いて表わすことで、数学で培われたさまざまな概念や技法を再利用することが出来る。

● 数学的な概念を用いて表わすことで、**抽象的に表すことが可能になる**。これは拡張や一般化の際にとっても役立つ。

など、**さまざまな(しかも、非常に大きな!)ご利益がある**。

1/29

例えば、命題論理では、論理式の真理値は真理値表を用いて計算できるが、述語論理ではそのように簡単にはいかない。しかし、数学的に定義した真理値の計算は、自然に述語論理へ一般化される。

その一方で、数学的な概念を用いると、**イメージや直観がわきにくい**、といったデメリットもあるかもしれない。数学的に与えられた定義から、そのイメージや直観をとらえるのも大事。

ということで、以下では、**集合や関数**、「**すべての○○について～**」や「**ある○○が存在して～**」といった言葉遣いなど、**基礎的な数学概念を用いる**。知識に不安のある者は付録を参照すること。

2/29

付値

定義 3.1. 真理値集合 $\{T, F\}$ を **Bool** と記す。命題変数集合 Var から真理値集合 Bool への関数のことを **付値** とよぶ。

なお、付値の具体例では、便宜的に、自然数の添字が付いた命題変数の集合 $\text{Var} = \{P_0, P_1, \dots\}$ を考える。

例. 次のようにして定義される関数 v_0 は付値である：

$$v_0(P_i) = \begin{cases} T & (i \text{ が偶数のとき}) \\ F & (i \text{ が奇数のとき}) \end{cases}$$

付値を指定することは、真理値表で行を1つ指定することに対応する。真理値表の行を1つ指定する(付値を決める)と、その時の命題論理式の真理値が定まる。これを解釈という(⇒次ページ)。

3/29

定義 3.2. 付値 v が与えられたときの命題論理式 A の **解釈** $\llbracket A \rrbracket_v$ を次のように定める。

$$\begin{aligned} \llbracket P \rrbracket_v &= v(P) \quad (\text{ただし, } P \text{ は命題変数}) \\ \llbracket \neg A \rrbracket_v &= \begin{cases} F & (\llbracket A \rrbracket_v = T \text{ のとき}) \\ T & (\llbracket A \rrbracket_v = F \text{ のとき}) \end{cases} \\ \llbracket A \wedge B \rrbracket_v &= \begin{cases} T & (\llbracket A \rrbracket_v = \llbracket B \rrbracket_v = T \text{ のとき}) \\ F & (\text{それ以外}) \end{cases} \\ \llbracket A \vee B \rrbracket_v &= \begin{cases} F & (\llbracket A \rrbracket_v = \llbracket B \rrbracket_v = F \text{ のとき}) \\ T & (\text{それ以外}) \end{cases} \\ \llbracket A \rightarrow B \rrbracket_v &= \begin{cases} F & (\llbracket A \rrbracket_v = T, \llbracket B \rrbracket_v = F \text{ のとき}) \\ T & (\text{それ以外}) \end{cases} \\ \llbracket A \leftrightarrow B \rrbracket_v &= \begin{cases} T & (\llbracket A \rrbracket_v = \llbracket B \rrbracket_v \text{ のとき}) \\ F & (\text{それ以外}) \end{cases} \end{aligned}$$

4/29

$$v_0(P_i) = \begin{cases} T & (i \text{ が偶数のとき}) \\ F & (i \text{ が奇数のとき}) \end{cases}$$

演習 3.3.

上の付値 v_0 について、前ページの定義に従って、 $\llbracket P_3 \wedge P_6 \rightarrow P_1 \rrbracket_{v_0}$ の解釈を計算せよ。先に計算した真理値が、 $P_3 \wedge P_6 \rightarrow P_1$ の真理値表のどの値に対応するか、考えよ。

5/29

演習 3.3.

定義より、 $\llbracket P_3 \rrbracket_{v_0} = F$, $\llbracket P_6 \rrbracket_{v_0} = T$. よって、 $\llbracket P_3 \wedge P_6 \rrbracket_{v_0} = F$. よって、 $\llbracket P_3 \wedge P_6 \rightarrow P_1 \rrbracket_{v_0} = T$

P_3	P_6	P_1	$P_3 \wedge P_6$	$(P_3 \wedge P_6) \rightarrow P_1$
T	T	T	T	T
T	T	F	T	F
T	F	T	F	T
T	F	F	F	T
F	T	T	F	T
F	T	F	F	T
F	F	T	F	T
F	F	F	F	T

6/29

演習 3.4.

$\llbracket P_1 \vee P_2 \rrbracket_v = \llbracket \neg P_1 \rrbracket_v = T$ となるとき, $\llbracket \neg P_2 \rrbracket_v$ の値がどうなるか示せ.

演習 3.4.

$\llbracket P_1 \vee P_2 \rrbracket_v = \llbracket \neg P_1 \rrbracket_v = T$ となるとき, $\llbracket \neg P_2 \rrbracket_v$ の値がどうなるか示せ.

(解答)

$\llbracket P_1 \vee P_2 \rrbracket_v = T$ より, $v(P_1) = T$ または $v(P_2) = T$.
 一方, $\llbracket \neg P_1 \rrbracket_v = T$ より, $\llbracket P_1 \rrbracket_v = F$ なので, $v(P_1) = F$.
 よって, $v(P_2) = T$ となることがわかる.
 よって, $\llbracket \neg P_2 \rrbracket_v = F$.

命題論理式の真理値の計算には, その命題論理式を構成する途中に
 使う部分命題論理式の計算が必要なことに注意.
 (\Rightarrow これは真理値表の計算でも同じだった.)

トートロジーと充足可能性

トートロジーと充足可能性を真理値表でなく付値を使って定義すると以下ようになる.

定義 3.5. A を命題論理式とする. 任意の付値 v について, $\llbracket A \rrbracket_v = T$ となるとき, A をトートロジーであるという.

A の真理値表で, すべての行が T となる場合に対応.

定義 3.6. A を命題論理式とする. ある付値 v が存在して, $\llbracket A \rrbracket_v = T$ となるとき, A を充足可能であるという.

1箇所でも A の真理値表に T となる行がある場合に対応.

演習 3.7.

(解答) 任意の付値 v について, $\llbracket \neg P \vee P \rrbracket_v = T$ となることを示す.

$v(P) = T$ のとき.

このとき, $\llbracket P \rrbracket_v = T$ となるので, $\llbracket \neg P \vee P \rrbracket_v = T$ が成立.

$v(P) = F$ のとき.

このとき, $\llbracket \neg P \rrbracket_v = T$ となるので, $\llbracket \neg P \vee P \rrbracket_v = T$ が成立.

演習 3.8.

(解答) $v(P) = T, v(Q) = F$ なる付値 v をとると, $\llbracket P \vee Q \rrbracket_v = T$, $\llbracket \neg Q \rrbracket_v = T$ となるので, $\llbracket (P \vee Q) \wedge \neg Q \rrbracket_v = T$. よって, $(P \vee Q) \wedge \neg Q$ は充足可能.

トートロジーと充足可能性の関係

定理 3.9.

1. A はトートロジー $\iff \neg A$ は充足不能
2. A は充足可能 $\iff \neg A$ はトートロジーでない

(証明)

1. A はトートロジー

\iff 任意の付値 v について, $\llbracket A \rrbracket_v = T$
 (トートロジーの定義より)

\iff 任意の付値 v について, $\llbracket \neg A \rrbracket_v = F$ (解釈の定義より)

\iff 任意の付値 v について, $\llbracket \neg A \rrbracket_v \neq T$

$\iff \llbracket \neg A \rrbracket_v = T$ となるような付値 v は存在しない

$\iff \neg A$ は充足不能 (充足可能性の定義より)

2. 省略

□
12/29

目次

- 命題論理の意味論
- モデルと反例
- ブール関数

モデルと反例

定義 3.10. A を命題論理式, v を付値とする. $\llbracket A \rrbracket_v = T$ となるとき, v を A のモデルとよぶ. これを $v \models A$ と記す.

定義 3.11. A を命題論理式, v を付値とする. $\llbracket A \rrbracket_v = F$ となるとき, v を A の反例とよぶ. これを $v \not\models A$ と記す.

例 3.12. 先に与えた付値 v_0

$$v_0(P_i) = \begin{cases} T & (i \text{ が偶数のとき}) \\ F & (i \text{ が奇数のとき}) \end{cases}$$

では, $\llbracket P_3 \wedge P_6 \rightarrow P_1 \rrbracket_{v_0} = T$ だったから, $v_0 \models P_3 \wedge P_6 \rightarrow P_1$.
 つまり, v_0 は $P_3 \wedge P_6 \rightarrow P_1$ のモデル.

演習 3.7.

$\neg P \vee P$ がトートロジーであることを解釈の定義を用いて示せ.

演習 3.8.

$(P \vee Q) \wedge \neg Q$ が充足可能であることを解釈の定義を用いて示せ.

演習 3.13. 命題論理式 $P_3 \wedge P_6 \rightarrow P_1$ の反例を求めよ.

演習 3.15. 同様にして, 上記2.の証明を示せ.

14/29

18/29

演習 3.13. 命題論理式 $P_3 \wedge P_6 \rightarrow P_1$ の反例を求めよ.

$\llbracket (P_3 \wedge P_6) \rightarrow P_1 \rrbracket_{v_1} = F$ となるためには, $\llbracket P_3 \wedge P_6 \rrbracket_{v_1} = T$ かつ $\llbracket P_1 \rrbracket_{v_1} = F$ となる必要がある. $\llbracket P_3 \wedge P_6 \rrbracket_{v_1} = T$ となるためには, $\llbracket P_3 \rrbracket_{v_1} = \llbracket P_6 \rrbracket_{v_1} = T$ となる必要がある.

実際,

$$v_1(P_i) = \begin{cases} T & (i \text{ が } 3 \text{ の倍数のとき}) \\ F & (\text{それ以外のとき}) \end{cases}$$

とくと, $\llbracket P_3 \wedge P_6 \rrbracket_{v_1} = T$, $\llbracket P_1 \rrbracket_{v_1} = F$ となり, $\llbracket (P_3 \wedge P_6) \rightarrow P_1 \rrbracket_{v_1} = F$ となる. よって, v_1 は反例.

15/29

演習 3.15. 同様にして, 上記2.の証明を示せ.

(解答)

2. $\neg A$ はトートロジー

\iff 任意の付値 v について, $\llbracket \neg A \rrbracket_v = T$
(トートロジーの定義より)

\iff 任意の付値 v について, $\llbracket A \rrbracket_v = F$
(解釈の定義より)

\iff 任意の付値 v について, v は反例
(反例の定義より)

$\iff A$ のモデルが存在しない
(モデルの定義より)

□

18/29

P_3	P_6	P_1	$P_3 \wedge P_6$	$(P_3 \wedge P_6) \rightarrow P_1$
T	T	T	T	T
T	T	F	T	F
T	F	T	F	T
T	F	F	F	T
F	T	T	F	T
F	T	F	F	T
F	F	T	F	T
F	F	F	F	T

青色の行の対応する付値は反例, 赤色の行に対応する付値はモデル

16/29

充足可能性と, モデル・反例

定理 3.16.

1. A は充足可能 $\iff A$ はモデルをもつ
2. $\neg A$ は充足可能 $\iff A$ は反例をもつ

(証明)

1. A は充足可能

\iff ある付値 v について, $\llbracket A \rrbracket_v = T$
(充足可能性の定義より)

$\iff A$ のモデルが存在する
(モデルの定義より)

2. 省略

□

19/29

トートロジーと, モデル・反例

定理 3.14.

1. A はトートロジー $\iff A$ は反例をもたない
2. $\neg A$ はトートロジー $\iff A$ はモデルをもたない

(証明)

1. A はトートロジー

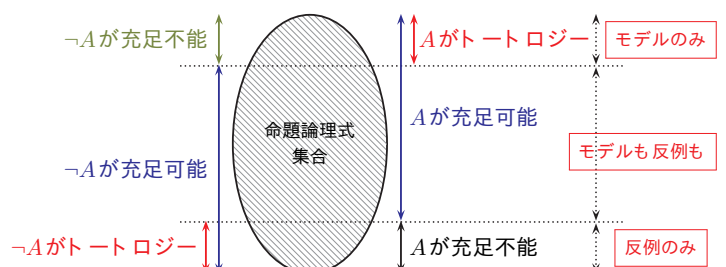
\iff 任意の付値 v について, $\llbracket A \rrbracket_v = T$
(トートロジーの定義より)

\iff 任意の付値 v について, $\llbracket A \rrbracket_v \neq F$
(真理値の定義より)

\iff 任意の付値 v について, v は反例でない
(反例の定義より) □

17/29

命題論理式集合の全体像



20/29

命題定数 \top と \perp の導入

モデルしか持たない場合や反例しか持たない場合は非常に重要であるので、これらを表わす0引数の命題結合子(命題定数)を導入し、命題論理式を拡張する。

\top 真を表わす命題

読み方:「top」

\perp 偽を表わす命題

読み方:「bottom」,「bot」,「矛盾」

21/29

命題結合子の解釈

命題結合子 \wedge は、命題論理式 A, B からより複雑な命題論理式 $A \wedge B$ を構成する。このとき、 $\llbracket A \wedge B \rrbracket_v$ の値は、 $\llbracket A \rrbracket_v$ と $\llbracket B \rrbracket_v$ の値のみで決まるが、その値の対応は左下に示すブール関数 f となる：

f	A	B	$A \wedge B$
$f(T, T) = T$	T	T	T
$f(T, F) = F$	T	F	F
$f(F, T) = F$	F	T	F
$f(F, F) = F$	F	F	F

この関数は、 \wedge の真理値表(右側)の役割に他ならない！

同様に、それぞれの命題結合子の解釈について、対応するブール関数が存在する。

24/29

定義 3.17. 命題論理式集合 Prop を以下のように与える：

$$\begin{aligned} P \in \text{Var} &::= P \mid Q \mid \dots \\ A, B \in \text{Prop} &::= P \mid \top \mid \perp \mid (\neg A) \mid (A \wedge B) \mid (A \vee B) \\ &\quad \mid (A \rightarrow B) \mid (A \leftrightarrow B) \end{aligned}$$

したがって、 $\top \rightarrow (P \rightarrow \perp)$ などは命題論理式。

定義 3.18. \top, \perp の解釈を次のように定め、命題論理式の解釈を拡張する。

$$\begin{aligned} \llbracket \top \rrbracket_v &= T \\ \llbracket \perp \rrbracket_v &= F \end{aligned}$$

したがって、 $v(P) = T$ のとき、 $\llbracket P \rightarrow \perp \rrbracket_v = F$ 。したがって、 $\llbracket \top \rightarrow (P \rightarrow \perp) \wedge \top \rrbracket_v = F$ 。

22/29

定義 3.20. ブール関数 bot, top, not, and, or, imp, iff を以下のように定義する。

$$\begin{aligned} \text{bot} &= F \\ \text{top} &= T \\ \text{not}(x) &= \begin{cases} F & (x = T \text{ のとき}) \\ T & (x = F \text{ のとき}) \end{cases} \\ \text{and}(x, y) &= \begin{cases} T & (x = y = T \text{ のとき}) \\ F & (\text{それ以外}) \end{cases} \\ \text{or}(x, y) &= \begin{cases} F & (x = y = F \text{ のとき}) \\ T & (\text{それ以外}) \end{cases} \\ \text{imp}(x, y) &= \begin{cases} F & (x = T, y = F \text{ のとき}) \\ T & (\text{それ以外}) \end{cases} \\ \text{iff}(x, y) &= \begin{cases} T & (x = y \text{ のとき}) \\ F & (\text{それ以外}) \end{cases} \end{aligned}$$

25/29

目次

- 命題論理の意味論
- モデルと反例
- ブール関数

ブール関数 bot, top, not, ..., および、命題結合子 \perp, \top, \neg, \dots の解釈の対応は以下の定理によって与えられる。

定理 3.21. v を付値、 A, B を命題論理式とすると、以下の性質が成立する。

$$\begin{aligned} \llbracket \perp \rrbracket_v &= \text{bot} \\ \llbracket \top \rrbracket_v &= \text{top} \\ \llbracket \neg A \rrbracket_v &= \text{not}(\llbracket A \rrbracket_v) \\ \llbracket A \wedge B \rrbracket_v &= \text{and}(\llbracket A \rrbracket_v, \llbracket B \rrbracket_v) \\ \llbracket A \vee B \rrbracket_v &= \text{or}(\llbracket A \rrbracket_v, \llbracket B \rrbracket_v) \\ \llbracket A \rightarrow B \rrbracket_v &= \text{imp}(\llbracket A \rrbracket_v, \llbracket B \rrbracket_v) \\ \llbracket A \leftrightarrow B \rrbracket_v &= \text{iff}(\llbracket A \rrbracket_v, \llbracket B \rrbracket_v) \end{aligned}$$

(証明) 解釈の定義および bot, top, not, and, or, imp, iff の定義より。 \square

26/29

ブール関数 (boolean function)

付値を与えると解釈が定まるという関係は、もう少し直接的に、ブール関数という概念に対応する。

定義 3.19. $f : \text{Bool}^n \rightarrow \text{Bool}$ なる関数を (n 引数) ブール関数という。

例. 以下で与えられる関数 f は2引数ブール関数である。

$$\begin{aligned} f(T, T) &= T & f(T, F) &= F \\ f(F, T) &= F & f(F, F) &= T \end{aligned}$$

例. 2引数ブール関数は $2^4 = 16$ 個ある。

例. 0引数ブール関数は、 T, F の2個と考える。

23/29

ブール関数 bot, top, not, and, or, imp, iff を用いると、解釈の計算は以下のように式変形を使って出来る。

例. 以下の付値 v_0 を考える。

$$v_0(P_i) = \begin{cases} T & (i \text{ が偶数のとき}) \\ F & (i \text{ が奇数のとき}) \end{cases}$$

このとき、 $\llbracket P_3 \wedge P_6 \rightarrow P_1 \rrbracket_{v_0}$ を値を式変形で計算する。

$$\begin{aligned} \llbracket P_3 \wedge P_6 \rightarrow P_1 \rrbracket_{v_0} &= \text{imp}(\llbracket P_3 \wedge P_6 \rrbracket_{v_0}, \llbracket P_1 \rrbracket_{v_0}) \\ &= \text{imp}(\text{and}(\llbracket P_3 \rrbracket_{v_0}, \llbracket P_6 \rrbracket_{v_0}), \llbracket P_1 \rrbracket_{v_0}) \\ &= \text{imp}(\text{and}(F, T), F) \\ &= \text{imp}(F, F) \\ &= T \end{aligned}$$

27/29

この式変形には、2種類の対象が含まれていることに注意.

(1) 命題論理式:

$$P_1, P_3, P_6, P_3 \wedge P_6, (P_3 \wedge P_6) \rightarrow P_1.$$

(2) 真理値を表わす式:

$\llbracket P_1 \rrbracket_{v_0}, \llbracket P_3 \rrbracket_{v_0}, \llbracket P_6 \rrbracket_{v_0}, \text{and}(\llbracket P_3 \rrbracket_{v_0}, \llbracket P_6 \rrbracket_{v_0}), \text{imp}(F, F)$
など.

従って、この2種類を混同した式、例えば、 $\llbracket P_1 \rrbracket_{v_0} \wedge \llbracket P_2 \rrbracket_{v_0}$
や $\text{and}(P_1, P_2)$ などは、おかしいことがわかるだろうか?

28/29

よく用いる集合

$\mathbb{N} \stackrel{\text{def}}{=} (0 \text{ を含む }) \text{ 自然数全体の集合 } \{0, 1, 2, \dots\}$

$\mathbb{Z} \stackrel{\text{def}}{=} \text{ 整数全体の集合 } \{\dots, -2, -1, 0, 1, 2, \dots\}$

$\mathbb{Q} \stackrel{\text{def}}{=} \text{ 有理数全体の集合 } \text{ 分数}$

$\mathbb{R} \stackrel{\text{def}}{=} \text{ 実数全体の集合 } \text{ 有理数と無理数}$

32/29

まとめ

- 付値と解釈 $\llbracket A \rrbracket_v$
- モデルと反例
- 命題定数 \perp, \top
- ブール関数

29/29

集合の表記

定義 3.23. [集合の表記]

(1) $\{a_1, \dots, a_n\} \stackrel{\text{def}}{=} \text{ 対象 } a_1, \dots, a_n \text{ からなる集合}$

要素の順番は関係ない. どのような要素が含まれているかが問題.

$a_i \in \{a_1, \dots, a_n\} \ (i = 1, \dots, n) \text{ が成立}$

(2) 内包表記

$\{x \mid A(x)\} \stackrel{\text{def}}{=} \text{ 性質 } A \text{ を満たすものの集合}$

$\{x \in U \mid A(x)\} \stackrel{\text{def}}{=} \text{ 性質 } A \text{ を満たす集合 } U \text{ の要素の集合}$

$\{f(x) \mid A(x)\} \stackrel{\text{def}}{=} \text{ 性質 } A \text{ を満たす } x \text{ について } f(x) \text{ を集めた集合}$

例. $\{s \in \{a, b\}^* \mid s = a^*b\} \quad \{x \in \mathbb{N} \mid 4 \leq x \leq 12\}$
 $\{x^2 \mid x \in \mathbb{N}, 4 \leq x \leq 12\}$

33/29

補足資料

以下は、本講義で用いる、集合・関係・関数といった基礎的な数学知識の簡単な紹介. この辺りの知識に不安のある者は参照のこと.

30/29

内包表記の性質

内包表記の以下の性質はよく用いる.

$$a \in \{x \mid A(x)\} \iff A(a)$$
$$a \in \{x \in U \mid A(x)\} \iff a \in U \text{ かつ } A(a)$$

例.

$$6 \in \{x \in \mathbb{N} \mid 4 \leq x \leq 12\} \iff 6 \in \mathbb{N} \text{ かつ } 4 \leq 6 \leq 12$$

$$3 \in \{x \in \mathbb{N} \mid 4 \leq x \leq 12\} \iff 3 \in \mathbb{N} \text{ かつ } 4 \leq 3 \leq 12$$

後者の例のように、両辺が正しくなくてもよい.

参考: $a \in \{x \in U \mid A(x)\} \iff a \in U \text{ かつ } A(a) \iff a \in \{x \mid x \in U, A(x)\}$

34/29

集合

- 集合 — 対象の集まりのこと
- 要素(または元) — 集合を構成している対象のこと

数学的概念としてのポイント:

1. 2つの対象が同じものかどうかははっきりしている
2. ある対象が集合に入っているかどうかははっきりしている

定義 3.22. [集合の要素]

$a \in U \stackrel{\text{def}}{\iff} \text{ 対象 } a \text{ が集合 } U \text{ の要素}$

$a \notin U \stackrel{\text{def}}{\iff} \text{ 対象 } a \text{ が集合 } U \text{ の要素でない}$

$\stackrel{\text{def}}{\iff}$ は定義として同値, つまり, 左辺を右辺により定義することを意味する.

31/29

全称と存在

「 x は偶数である」「 $x^2 = 1$ 」, といった x に関する性質に基づいた命題として2通りの基本的な命題がある.

どのような x についても $A(x)$ が正しいことを表わす命題を「任意の x について $A(x)$ 」「全ての x について $A(x)$ 」と書く. (記号では $\forall x A(x)$ と記す. \forall を全称記号とよび, **forall** とよむ.)

ある x について $A(x)$ が正しいことを表わす命題を「ある x が存在して $A(x)$ 」「 $A(x)$ となる x が存在する」と書く. (記号で $\exists x A(x)$ と記す. \exists を存在記号とよび, **exists** とよむ.)

“存在”は1個以上なら何個でも存在してよい.

35/29

全称と存在の関係

全称と存在(と否定)についての以下の関係(ド・モルガンの法則)は重要:

$$\begin{aligned}\text{not } (\forall x A(x)) &\iff \exists x (\text{not } A(x)) \\ \text{not } (\exists x A(x)) &\iff \forall x (\text{not } A(x))\end{aligned}$$

つまり,

「全ての x について $A(x)$ が成立するわけではない」と

「 $A(x)$ が成立しないような x が存在する」ことは同値、ということを行っている。

(例)「全ての整数が偶数であるわけではない」 \iff 「偶数でない整数が存在する」

36/29

対と直積集合

定義 3.28. [対]

x と y の対を $\langle x, y \rangle$ と記す。対の等価性を以下のように定義する。 $\langle x_1, y_1 \rangle = \langle x_2, y_2 \rangle \stackrel{\text{def}}{\iff} x_1 = x_2 \text{ かつ } y_1 = y_2$

直積集合 2つの集合の要素の対からなる集合

$$U \times V = \{\langle x, y \rangle \mid x \in U, y \in V\}$$

例. $\{1, 2, 3\} \times \{A, B\} = \{\langle 1, A \rangle, \langle 2, A \rangle, \langle 3, A \rangle, \langle 1, B \rangle, \langle 2, B \rangle, \langle 3, B \rangle\}$

$U \times U$ を U^2 と略記する。 U^2 を一般化して、 n 重対集合 U^n を考えることが出来る。

例. $\{\langle x, y \rangle \in \mathbb{R}^2 \mid x + y = 1\}$

40/29

集合の等価性と部分集合

以下はみな同じ集合:

$$\{1, 2, 3\}, \{x \in \mathbb{N} \mid 1 \leq x \leq 3\}, \{x \in \mathbb{N} \mid 0 < x < 4\}$$

つまり、集合の等しさは、表し方によらず、要素が等しいかだけで決まっている。

定義 3.24. [部分集合]

U, V を集合とする。 U のどの要素も V の要素でもあるとき、 $U \subseteq V$ と記し、 U を V の部分集合であるという。

集合の等価性は、以下のように定義される。

定義 3.25. [集合の等価性]

$$U = V \stackrel{\text{def}}{\iff} U \subseteq V \text{ かつ } V \subseteq U$$

37/29

2項関係

直積集合の部分集合を、2項関係とよぶ。

$$R \text{ が 2項関係 } \stackrel{\text{def}}{\iff} R \subseteq U \times V$$

特に $R \subseteq U^2$ のとき、 U 上の2項関係ともいう。また、 $R \subseteq U^n$ なる R のことを U 上の n 項関係という。

例. $\{\langle 0, 1 \rangle, \langle 0, 2 \rangle, \langle 1, 2 \rangle\}$ は $\{0, 1, 2\}$ 上の2項関係。

$\langle a, b \rangle \in R$ を aRb と略記することが多い。

例. 自然数の大小を表す \leq は自然数上の2項関係である。 $\leq = \{\langle x, y \rangle \in \mathbb{N}^2 \mid \exists z \in \mathbb{N} (x + z = y)\}$ 。

41/29

無限集合

集合概念の強力さは、無限集合を扱うところにある。

定義 3.26. [無限和集合, 無限積集合]

$$\begin{aligned}\bigcup_{i \geq 0} U_i &\stackrel{\text{def}}{=} \{x \mid \exists i \geq 0 (x \in U_i)\} \\ \bigcap_{i \geq 0} U_i &\stackrel{\text{def}}{=} \{x \mid \forall i \geq 0 (x \in U_i)\}\end{aligned}$$

演習 3.27. $i \in \mathbb{N}$ とし、 $U_i = \{x \in \mathbb{N} \mid x \geq i\}$ とおく。このとき、 $\bigcap_{i \geq 0} U_i$ はどのような集合になるか? また、 $V_i = \{x \in \mathbb{N} \mid x \leq i\}$ とおくとき、 $\bigcup_{i \geq 0} V_i$ はどのような集合になるか?

$$U_0 = \{0, 1, 2, \dots\}, U_1 = \{1, 2, \dots\}, U_2 = \{2, 3, \dots\}, \dots$$

38/29

2項関係の性質

R を U 上の2項関係とする。

$$\begin{aligned}R: \text{ 反射的 } &\stackrel{\text{def}}{\iff} \forall x (xRx) \\ R: \text{ 推移的 } &\stackrel{\text{def}}{\iff} \forall x, y, z ((xRy \text{ かつ } yRz) \text{ ならば } xRz) \\ R: \text{ 対称的 } &\stackrel{\text{def}}{\iff} \forall x, y (xRy \text{ ならば } yRx) \\ R: \text{ 反対称的 } &\stackrel{\text{def}}{\iff} \forall x, y ((xRy \text{ かつ } yRx) \text{ ならば } x = y) \\ R: \text{ 同値関係 } &\stackrel{\text{def}}{\iff} R: \text{ 反射的, 推移的かつ対称的} \\ R: \text{ 半順序 } &\stackrel{\text{def}}{\iff} R: \text{ 反射的, 推移的かつ反対称的}\end{aligned}$$

例 3.29. 次の関係は上にあげた性質のうちどれを満たすか?

- (1) 自然数上の、3で割った余りが等しい、という関係
- (2) 正整数上の、割り切れる、という関係

42/29

関数

定義 3.30. [関数]

関係 $f \subseteq U \times V$ が以下の条件を満たすとき、 f を集合 U から集合 V への関数とよぶ: 任意の $x \in U$ に対して、 xfy となる $y \in V$ が丁度1つだけ存在する。関数 f が、集合 U から集合 V への関数であることを明示するとき、 $f: U \rightarrow V$ と記述することがある。また、 $x \in U$ に対して、 xfy となる(唯1つある) y を $f(x)$ と記す。

関係が関数のとき、 R ではなく f, g, \dots 等の記号を用いることが多い。 U が n 重対集合のとき、 f は n 引数関数となり、 $f(\langle x_1, \dots, x_n \rangle)$ の代わりに $f(x_1, \dots, x_n)$ と記す。

例. $-: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}, +: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}$

43/29

$$\begin{aligned}U_0 &= \{0, 1, 2, \dots\} \\ U_1 &= \{1, 2, \dots\} \\ U_2 &= \{2, 3, \dots\} \\ &\dots \\ U_k &= \{k, k+1, \dots\} \\ U_{k+1} &= \{k+1, \dots\}\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}k \in \bigcap_{i \geq 0} U_i &\iff \forall i \geq 0 (k \in U_i) \\ &\iff \forall i \geq 0 (k \in \{x \in \mathbb{N} \mid x \geq i\}) \\ &\iff \forall i \geq 0 (k \in \mathbb{N} \text{ かつ } k \geq i) \\ &\iff \text{偽} \text{ (} i = k+1 \text{をとると成立しない)}\end{aligned}$$

つまり、どのような k についても、 $k \notin \bigcap_{i \geq 0} U_i$ が成立する。よって、 $\bigcap_{i \geq 0} U_i = \emptyset$ 。

(同様に計算すると、 $\bigcup_{i \leq 0} V_i = \mathbb{N}$ となる。)

39/29